

フッサールにおける中立的潜在性から中立的受動性への変遷について

田 中 俊

論文要旨

本稿の目的は、フッサール現象学における空想理論を、潜在性から受動性への変遷との連関から考察することである。『イデーニ I』において潜在性は多様な意味で登場する。ここで重要なのが注意における潜在性であり、それによって自我対向に先立つ次元が記述される。この潜在性が後期の『受動的総合の分析』においては受動性と呼ばれるものとの共通性を持つと考えられる。他方で潜在性の議論は、伝統的に空想論と結びついており、こうした状況はフッサールの空想理論、即ち、中立性変様の議論でも同様である。そのため、中立的な潜在性を中立的な受動性として考察することが可能になるだろう。そして受動的な中立性の具体例としての「思いつき」を挙げつつ、静態的現象学における中立的な潜在性と発生的現象学における潜在性受動性との対応関係を具体的に素描する。以上の考察を通して、フッサールにおける空想理論の全貌を明らかにするための道を開く。

キーワード【空想、中立性、潜在性、受動性、思いつき】

序

本稿の目的は、フッサール現象学における空想理論を、潜在性から受動性への変遷との連関から考察することである。これを問う動機は次の通りである。

この目的を据えるそもそもの動機は、フッサールによる空想理論の解明という点にある。フッサール現象学は一般に、『イデーニ I』¹⁾の考察がその好例であるが、知覚体験を中心に据えた体系を持つ。つまり現象学は、現在の顕在的な志向的体験を最も原的なものと見定めた上で、様々な意識の在り方をその変様態として説明する。そうした中で、「空想」(Phantasie)という意識の在り方も知覚との対比から説明されることになる。ところが、世界全体を原的な知覚体験を中心に統一するというフッサール現象学の考え方に反して、空想はその統一から隔絶するという特異にして難解な特徴がある。そのためフッサールは、この空想というものが現実知覚と異なることは認めるが (Vgl. X X III . 10, 16, X IX /2, 609f. usw.)、しかしそのように相異なる両者間の移行はいかにして可能になっているのか、という点は必ずしも明確にはしていない。つまり問題は、空想と現実の接点はどこにあるのか、ということである。たとえ空想が現実から隔絶しているとはいえ、空想体験も何らかの動機づけを持

つはずである。

以上のような問題に取り組むにあたり、注目すべき契機は二つある。一つ目は、「中立性変様」(Neutralitätsmodifikation)である。これは『イデーニ I』において詳論される、空想と深い関わりを持つ意識変様である。従って中立性変様は、空想という問題に対してフッサール現象学がいかなる見方を取り得るのか、ということを考察するための手掛かりになるのである。

ではそもそもなぜ、フッサールは空想を論じるためにこの中立性という性格を用いるのか。それは、ここでフッサールが、空想に関するある伝統的な理論を論敵として想定しているからである。その伝統的な空想論とは、古くはアリストテレスの「弱くなった感覚」(αἰσθησις ἀσθενής)に由来する説明であり(X X III .634)、またそれを受け継ぐヒュームの哲学であるという(X X III .13f.)。この系譜に属する空想論において、空想は明瞭性や活発性等の点から特徴づけられる²⁾。

しかしこれに対してフッサール現象学の側から見ると、この弱くなった感覚とは把持的で空虚な地平、あるいは「潜在性」(Potentialität)に他ならない。実際、「生き生きとした空想」は必ずしも矛盾を孕むものではないだろう。そのため現象学において事象的に空想を扱う場合には、活発さの弱まりに依拠する従来の空想理解とは異なる枠組みとして、中立性が必要になるのである。

こうした点で、中立性は潜在性とは区別された概念でなければならない。しかしその一方で、本論で確認する通り、両者は一定の関係を持つものでもある。そうした中で本稿では、この潜在性には空想を解明する二つ目の手掛かり、即ち、「受動性」(Passivität)との連関が認められる、という点に着目する。

では、なぜ受動性が空想を理解するための手掛かりとなり得るのか。それは、知覚でも空想でもノエマの意味は同一であり、そのため、少なくともその意味が構成される場所の受動性の次元には空想と知覚の接点が見出されるべきだと考えられるためである。そして実際、この見方に一定の妥当性があるということは『経験と判断』の記述から認められ得る。というのも、後期の草稿である『経験と判断』においては、受動性の次元からの空想分析が実際になされていることが認められるからである。

ただしこの点を詳しく論じるには、フッサールが空想に関して一つ一つの著作で主題的に記述することが少ないという困難がある。それ故この点からも、前期・後期を問わず、諸著作における空想論を一つの整合的な空想論へとまとめることが重要となる³⁾。つまりフッサールの空想理論の全体を把握するためには、フッサールの中期思想と後期思想の間にある隔たりを埋めねばならない。従って、能動性の次元を扱う静態的現象学と受動性の次元を扱う発生的現象学という隔りがある両著作の、それぞれの空想論を架橋することが、本稿の課題となる。

本稿で明らかにすべきことは次の二点である。第一に、静態的現象学と一般に見なされ、かつ『イデー I』において“受動性”と呼ばれるべき次元が、既に（それとは自覚されずに）見出されており、なおかつ中立性変様の議論においてその議論が本質的に関わっていることを示すこと⁴⁾。第二に、『イデー I』以降も、受動性の議論が空想理論に関わり続けているということを示すこと。

以上の二点を証明するために、本稿では四つの段階を経ることになる。第一に、『イデー I』において中立性変様を巡りいかなる議論がなされたのかをまとめる。第二に、『イデー I』において既に、後期の用語で言えば“受動性”に対応するような次元が見出されているということを示す。その際に、フッサール現象学における「受動性」とはどのようなものであるのかを、『受動的総合の分析』の記述からまとめ、それを『イデー I』の議論と比較する。そうした上で第三に、その受動性が空想と関連付けて論じられていることは、偶然的ではなく、本質的なことであるという点を確認する。第四に、実際に『イデー I』以降も空想の議論が受動性との連関において論じられているということを確認し、『経験と判断』の分析とそれ以前の考察が互換性のあるものであることを示す。以上の四点について一節ごとに取り組み、結論へと結び付けていきたい。

第一節 『イデー I』における論脈の確認

まずは考察の前提となるところの『イデー I』で展開される議論を確認していきたい。中立性変様が問題になるのは『イデー I』第3篇第4章においてである。この章の目的は、それに先行する章で登場したノエシス-ノエマの図式をより詳しく分析することにある。特に第四章の後半部ではノエシス-ノエマの「定立性格」および「様相」に焦点が当てられており、中立性という特異な性格もその中で話題となってくる。

中立性変様が主題になるのは第109および110節からである。肯定、否定、懐疑などの様相や性格に対立し、それらから「完全に隔絶した立場にある」(III /1, 247) ものとして中立性は登場する。その対立軸は「設定立的」であるか否か、つまり「現実」のこととして受け取られるか否かという点にある。こうした中立的な性格を表す表現が、後の節では「いわば」(“gleichsam”) 様相とも名付けられる (III /1, 256)。即ち、「いわば肯定」などという具合で、有意味でありつつも現実的な妥当性に囚われない在り方が表現される。

現実囚われないというこの点において、中立性には空想との共通性が認められる。しかし両者は区別されねばならないということが、続く第111および112節では述べられる。それによると、「[...] 空想することは一般に、「措定的」準現在化の中立性変様であり、従って、考えられる限りで最も広い意味での想起の中立性変様である」(III /1, 250)。しかしこれに対して、知覚が中立性変様されることもある。その場合は「像客観意識」になるという

(Ⅲ /1, 251f.)。以上のことから、空想とは中立性変様をもたらす結果の一つであるということが明らかになる。従って、中立性変様は空想を包含するより広い概念であり、同時に、前者は後者を可能にする必要条件であるということが明らかになる。そしてこの限りで両者を同一視することはできないのである。

更にここから、両者には「反復可能性」をめぐる相違が生じる。即ち、空想の場合には「空想の中での空想」といった反復が可能であるが、中立性変様は反復不可能であるという(Ⅲ /1, 252f.)。この相違は第一の区別と合わせて考えれば了解されるだろう。まず、「第一段階の空想」は更に「空想の中の空想」への移行が可能であるわけだが、その際両者はそれぞれ独立した虚構世界が展開されているという点でもって区別されている。逆に言えば、もし両者が同じ空間-時間的地平を共有しているならば、それは「空想の中の空想」が成立しているとは言われまいだろう。これに対して、中立性変様の観点から見れば、中立化された準現在化から中立化された準現在化へと展開しただけのことであり、いずれにせよ中立化された範囲の中での出来事に過ぎないのである。

ともあれ、ひとまずは以上の点から中立性変様の役割を規定しておくことはできるだろう。しかし本稿で注目したいのは、中立性変様の役割はこれだけではない、という点である。それは以降の展開に目を向けると明らかになる。

続く第113から115節では一転して、中立性と「潜在性」の関わりが主題となる。潜在性とは、つまり「地平」である。この潜在的な地平へと眼差しが向けられることによって顕在的な志向的体験が成立している。ここでフッサールが強調するのは次の二点である。即ち、中立性は潜在性とは異なる概念であるということ、これが第一点である。そして第二点は、中立性の内にも顕在性と潜在性は認められるということである。これは換言すれば、中立的な空想体験は、現実的な知覚体験と同様に、地平構造を持つということである。これは空想の中立性を潜在性と同一視しては不可能なことである。このように考えることによって、知覚と空想が構造上「平行的」(parallel)であることになる(Ⅲ /1, 259)。換言すれば、知覚と空想の区別は専らこの中立性の有無にのみ依拠することになる。そしてその結果、フッサールは空想を、知覚の変様態として扱うことができるようになるのである。

この平行関係は更に徹底化される。というのも、単なる潜在的定立の中立化に留まらず、「根元臆見」(Urdoxa)さえをも中立化できるとフッサールは述べるからである。根元臆見とは、「信念の仕方の「様相化されていない」根元形式」であり、「存在性格そのもの(ノエマ的に「確実」ないし「現実」に存在する)」という「あらゆる存在様相の根元形式」である(Ⅲ /1, 240)。こうした根元形式に基づいてこそ諸様相は様相として機能することができる。しかしこの、他の諸様相と「同じ立場」にはない根元臆見にも、「完全に隔絶した立場にある」中立性変様は適用可能であるとされる。「そうした〔様々な様相の〕場合は、そのつどの根元臆見が現実的な臆見、言うなれば現実的に信じられている信念であるか、それともそ

の信念に対する力のない対称者、即ち、(存在そのものや可能性などを)単に「思い浮かべる」かのいずれかであるか、ということによって根源的に区別される」(Ⅲ /1, 261)。しかも中立的意識の内には「現実的な」述定は一切含まれない。現実性と中立性は徹頭徹尾、根本から枝分かれしているものとされるのである。

以上の潜在性に関する考察は、ノエマの側が持つ様相としての潜在性が主に念頭に置かれていた。とはいえ同様のことは作用ないしノエシスの側についても言いうる。そのことを示すのが第 115 節である。ここでは中立性という次元があることを踏まえた上で、既に『イデーン I』で先立って詳論されていた「注意」(Aufmerksamkeit)における潜在性というものが再論されている。それはつまり、「注意と不注意の顕在性の区別」(Aktualitätsunterschiede der Aufmerksamkeit und Unaufmerksamkeit) (Ⅲ /1. 254)における潜在性である。それによると、「同様に、ある時は想起的あるいは中立的に、またある時は変様されずに、コギタチオが体験背景の中でほとぼり出ている。例えばある信念が、即ち、現実的な信念が「芽生えて」いる (“regen” sich)。我々は「我々がそれを知る以前にすでに信じている」(Ⅲ /1, 263)。ここにおいて、自我による注意が差し向けられる以前より、中立的なものはすでに中立的であるということが記述される。

以上のような流れで、中立性変様に関する議論は注意における潜在性を主題化するに至った。しかし、この第 115 節を一読すれば分かるように、ここでは中立性変様それ自身はもはや問題ではない。それは続く第 116 節でも同様である。そして最終的に第 117 節にて、「中立性変様が持つ臆見の設定立への関係は、たとえ重要な洞察がその根底にあるとしても、しかしある種の仕方でも回り道である」(Ⅲ /1, 268)と述べられた上で、中立性変様に関する議論は「終結」する。

第二節 『イデーン I』における“受動性”

以上で、『イデーン I』における中立性変様の議論を確認することはできた。続いて本節では、この一連の議論が“受動性”とでも呼ばれるべき次元に関わる議論である、という解釈を示す。とはいえもちろん、フッサール自身が『イデーン I』において受動性という概念区分を打ち出して詳論しているというわけではない。そのためここでは逆算的な手法を取ることとなる。即ち、後期の受動性に関する議論を参照し、それと『イデーン I』における一部の議論には本質的に重なり合う場面があるということを指摘する。

そのためにまず行うべきことは、『イデーン I』において“受動性”を論じていると目される箇所指定である。それは前節でも確認した、注意における潜在性に関する一連の議論である。その内容を、今度は中立性変様の観点からではなく、潜在性に焦点を合わせた仕方でも今一度まとめ直してみよう。

ここで主題となる注意とは作用であるため、ここでは作用の潜在性が問題になる。即ち、この論究は顕在的な志向的体験との対比において行われる。顕在的な志向的体験とは「自我」によって「遂行された」作用である。これに対して、潜在的な志向的体験は「遂行されていない」作用、あるいは更に「自我がその中において『遂行する主観』としては生きていない」(Ⅲ /1,263) ところの作用である。つまり後者の「遂行されていない」とは、顕在的には遂行されていないということであり、何より、顕在的な仕方では「我々がそれを知る以前に」既に潜在的に「芽生えて」いるという作用の在り方を述べたものである。更に、この遂行の有無は「態度決定」の有無に直結する。つまり、「遂行された作用、[...]」即ち、作用の遂行が、狭い意味での『態度決定』を成立させる」(Ⅲ /1,263) ののである。実際、まだ明確に相対することができていないものに対して、自分がどのように対処すべきかを決定できる人間などいないだろう。

ここで注目したいのは、次の二点である。一つは、この作用の潜在性が顕在的な作用に先立って活動しているとされる点である。この前後関係は態度決定を軸にして言われていた。そしてもう一点は、潜在性と自我との関わりである。即ち、フッサールはこの節に先立って既に、潜在的な志向的作用は「自我対向」(Ichzuwendung) を含まない、あるいは「自我からの遠さ」があると説明している (Ⅲ /1,189)。自我対向とは、自我が対象に対して「まなざし」を差し向けることによって、その対象を顕在的に注意し把握することである。ここにおいて顕在的な自我が顕在的な対象を把握する「コギト」が形成される。そのため、ここでの潜在的とは自我対向を経っていないということの意味している。ただし、潜在性と顕在性は断絶したものではなく、連続的でもある。そのため潜在性といえども、自我対向と無縁であることはできない。このことは「自我から遠い」「自我から近い」という表現から読み取ることができよう。

さてそれでは、「以上で指摘された箇所は“受動性”に関する議論を行っている」と主張するため、その根拠の呈示に移ろう。そのために、本稿で念頭に置かれている「受動性」とはいかなるものであるかを明示しよう。

受動性は周知の通り、能動性との対比において語られる。両者を区別する動機の一つに、判断や態度の決定という場面がある。両者の差は、「それ自体ないし事象それ自体に即して、つまり経験的で、現れ来る決定としての態度決定」と「自我による、自我の応答として遂行され決定される態度決定」との差異である (XI,51)。例えば、単に「人がいる」と知らず知らずの内に思い込んでしまっているということと、「あれが人形か人間かで迷ったが、人形だと信じることに決めた」という能動的な判断とは明らかに異なり、しかも、前者なしでは後者はあり得ないということも同時に了解される。以上のことから、両者の間で役割分担がなされる。即ち、能動性において「自我が特有の自我の作用によって、産出し構成するものの役割を果たす」(Ⅰ,111) が、それは「他方でしかし、能動性のあらゆる構成は必然的

に、先立って与える働きをしている受動性を最下層として前提とする」のである（I, 112）。

ただし、この「能動と受動という区別は固定的なものではない」（EU, 119）。というのも、能動性と受動性の間には明確に二分割できない層があるためである。この層では受動性からもたらされる質料を能動性が受け取るということが行われるわけだが、ここでの曖昧さとは、言い換えれば、能動性と受動性の境界の曖昧さである。この層をより詳しく見るならば、「受容性」（Rezeptivität）と「触発」（Affektion）とに区別される。その様子をそれぞれの側から見てみよう。

1. 受動性と受容性〔の段階〕。我々は受容することをこの〔受動性という〕第一段階に、つまり、能動的自我の原機能の段階として、数え入れることができる。その原機能は、その固有な志向性の形成体として受動性そのものの中で構成されるところのものを、単に有効なものとし、注視し、注意しつつ把握するという点でだけ成り立っている。2. 判断決定の場合がそうであったような、自我の固有の機能が活動するところの、自我の自発的（spontan）能動性の（知的活動の）段階（XI, 64）。

受容とはこのように、能動的自我が受動的志向において構成されたものを受け取ることを言う。注目すべきは、受容がここで「受動性そのものの中で構成されているもの」を扱うということでもって「受動性」および「原機能」に数え入れられている、ということである。ただしその一方で、「原」機能であるとはいえ「自我の」機能であるという点で、特に「把握する」という点で、受容は完全な受動性ではない。この点で受容性は「能動性の最低層」（EU, 83）とも呼ばれる。他方、こうした点で対比されるのが触発である。

我々は触発という表題で、意識に即した刺激、意識された対象が自我に働きかけるところのある特有な動向として理解する。——この動向は自我の対向において緩和され、更にそれに続き、対象的なそれ自体を次第に明確に露呈していく自己所与直観へと向かう努力の中で、つまり知ることへの努力、対象のより詳細な考察への努力の中で進展していく（XI, 148f.）。

このように触発の場合は「対象が自我に働きかける」のであり、この点で触発を自我の能動的能力と見なすことはできない。従って、「触発は受容する作用に先行する」（XI, 84）。とはいえこの触発は「自我の対抗において」も「緩和される」だけであり、ここでも能動的作用との、隔たりつつも連続的な関係が強調される。

それでは、ここまで見てきた受動性を持つ特徴と、前もって確認しておいた潜在性の特徴とを照らし合わせてみよう。第一に、潜在性は態度決定に先立つという点で顕在性に先立つ

のであった。これは受動性でも同じであろう。というのも、能動的自我の態度決定という観点から見て受動性は能動性に先立つからである。第二に自我との関わりという点であるが、潜在性は自我対向を含まず、「自我から遠い」のであった。この点でも、受動性は同じ特徴を持つと言えるだろう。というのも、触発は自我対向以前の働きであり、その上両者共に、「遠さ」と「緩和」という、自我対向との連続性が示唆される表現を伴っているからである。

以上二点が一致することから、あるいは少なくともその範囲内にとどまる限りにおいては、『イデーⅠ』において扱われていた潜在性と、後期で論じられた受動性、即ち、受容と触発の次元とを、重ねて考えることができるはずである。無論、以上の考察は「すべての潜在性が受動的な次元に属している」ということを主張するものではない。そうではなく、前期において潜在性と見なされていたものの一部に、受動性の次元において記述し直されるべきものがあつた、ということをも主張するものである。

第三節 中立性変様と潜在性の関係

これまでの考察が認められるならば、事実として、中立性変様の議論が受動性の次元へと行き着いた、ということが認められることになる。ただしこれだけでは、「どのような理由によるかはさておき、そのような結果になっている」ということが確認されたに過ぎない。そこで本節では、このような結果が、偶然そうっただけなのか、それとも何らかの必然性によって引き出されたのか、ということ考察しなければならない。本稿で目指すのは当然、後者の道である。では中立性変様のどこに、受動性の次元を引き出す必然性があるのだろうか。中立性変様にはただそうした可能性が担保されるというだけでなく、積極的に受動性へと議論を進める理由があるという点を考察したい。

では、中立性変様は何のために受動性へ至る必要があつたのか。その理由は、『イデーⅠ』の議論から見出すことができるだろう。即ち、中立性変様の議論がその主題を、空想との関係から潜在性との関係へと方向転換した地点に目を向けるのである。すると、潜在性を主題とし始める第113節の直前、即ち、第112節の末尾にある以下の議論が注目される。

[...] より高い段階のあらゆる空想〔＝空想の中の空想〕は、その中で間接的に空想されたものの直接的な空想へと自由に移行されうるわけだが、他方でこの自由な可能性は空想からそれに対応する知覚への移行においては成立しない。ここには自発性 (Spontaneität) にとっての裂け目が存するのであり、純粹自我は現実化する行動や創造 (これには恣意的な幻覚というものも数え入れられる) という本質的に新しい形式においてのみこの裂け目を乗り越えることができる (Ⅲ /1, 253)。

この論述は、本稿第一節でも触れておいた、空想の反復可能性に関係する議論として登場する。人間は恣意的に様々な空想を行うことができるのであり、ある空想世界から別の空想世界へと移り変わることができる。しかし、空想が持つ自由も無制限ではない。それは恣意的に決定できる範囲に限定された自由である。たとえ現実世界を厭い天国のような空想に逃避したところで、その天国と現実を同定することはできない。我々にできるのは、現実的な行動によってその現実を、思い描いた天国と同じ状況を作り上げることのみである。その限りで、現状を変更することができるのは現実的な行為のみであり、空想には現実を変更する力はない。他方で、例えば自由変更を語るときにフッサールが強調するように、現実のように事実性からの束縛を受けないということも空想の特徴である。そしてこの相互に影響を与えない無関係性こそが、本稿冒頭でも触れた、空想を考える上での主要な問題を生じさせている。それは即ち、この無関係な両者はいかなる接点を持っているのか、という問題である。

さて、この問題において重要なのは、上の引用でも明らかにされている通り、「自発性」にとっての不可能性が語られている点である。自発性はもちろん能動性に属するものである(XI.64, EU.233, usw.)。従って、先刻述べた空想の問題では、厳密に言えば、「自発的に行われた能動的な空想」と、「自ずから受容せざるをえない受動的な現実」との間にある無関係性が問題になっていると言える。つまりここでは、「現実と空想」という対比だけでなく、それに「能動性と受動性」という対比も加えた、二つの対立軸が複合的に絡み合っていると言えよう。この理解に従えば、空想の問題を解決するためには能動的な空想だけではなく、受動的な空想を捉えることが要求される。というのは、以下のように考えられるからである。即ち、受動性は能動性に先立ち、その点でより根底的な位置にある。そのため「能動的な空想」と、「自ずから受容せざるをえない現実」という対比では、既に受動性に基づいている現実性を優位な立場に立ててしまっており、その結果、現実と空想を公平に対比することができず、上述の問題を扱うことができないままになるからである。

そして、この不都合に応えるために中立性変様による議論がある、と見ることができる。本稿での解釈に従うならば、中立性変様とは受動的な次元における空想を考察可能にする枠組みである。この変様操作を機能させることができたならば、空想と現実を等しく受動性の次元において対比させることが可能になるのである。そしてそうすることによってはじめて、空想を「感覚の弱くなったもの」とする、伝統的な空想理解から脱することができるのである。

第四節 受動的な次元における空想としての「思いつき」

最後に考察したいのは、これまで論じてきた受動的な次元における空想とは、具体的には一体どのようなものなのか、ということである。通常フッサールが「空想」を論じる際に念

頭に置いているのは、自由な恣意に基づき虚構を生成するはたらきであり、その最たる例が自由変更の議論である(Ⅲ/1,147)。当然こうした場合の空想作用は能動性の次元に属している。一方で、潜在的な次元での中立性変様も認められるのであった。例えば「ニンフが池で乱舞している」という空想を行う場合、その空想の対象となっている世界はそれに固有な、即ち、現実世界から断絶された時間地平と空間地平を伴っていないなければならない。

では、その空想地平に関する注意の潜在性、即ち、受動性の次元で行われる状況としてはどのような場合が考えられるだろうか。それは例えば、不意に空想が襲い掛かってくるという場合であろう。即ち、他愛もないことが不意に頭の中に現れては消えていく、自ずから現れ出る「思いつき」という場面がそれである。実際、1920年初頭のフッサールは次のように述べている。

中立性は様々な仕方で動機づけられうる。それは「思いつき」(“Einfall”)として、模倣における「像客観意識」として、一定の権利を認められてはいるが設定立的には無価値な再生産の自由な戯れとして、そしてまたあらゆる設定立を恣意的に禁欲することとしても、登場しうるのである(XXⅢ,577)。

想起像が「受動的に」思いつきとして、即ち、受動的かつ単なる連想の動機づけの結果として、「自我の関与」なしに、即ち、能動的な努力という要素なしに、思い浮かぶということもまたあり得るのである(XXⅢ.554)。

前者の引用から「思いつき」が中立的な性格を持ち得るものであると考えられており、なおかつ後者の引用からは「思いつき」が触発の働きをされると考えられているということは明らかである。以上のことに加え、この「思いつき」という言葉の使い方から、以下のような解釈をすることができるかもしれない。「思いつき」の動詞形である「思いつく」(einfallen)は「何かが誰か(の心)に思いつく」(etwas fällt jemandem ein)という形で用いられる。ここでの主語は、自我ではなく対象である。従ってこの表現は、対象が自我対向を生じさせるための、触発の現場を表現している。以上のように解釈できるだろう。

いずれにせよ重要なことは次のことである。それは即ち、中立的なものは受動性の段階においても既に中立的であり、設定立的なものとは根底から対称を成している、ということが『イデーⅠ』からそれ以降の草稿に至るまで保持された図式である、ということである。

結論

本稿の考察から明らかになったことをまとめておこう。第一に、『イデーⅠ』において

注意における潜在性という概念によって、後期においては受動性と呼ばれるべき次元が既に論究されているということが明らかになった。そして第二に、その“受動性”の議論が中立性変様の議論に本質的に結びついているということが明らかになった。そしてその上で第三に、受動的な中立性の具体例を示すに伴い、『イデー I』以後に行われた受動性の議論との対応関係を素描することもできた。

これらの成果により、次なる課題へと前進することが可能となった。その課題とは、本稿で明らかになった議論が、後期の『経験と判断』において展開されている空想の議論とどこまで接続可能であるかを検証することである。特に問題になると思われるのが、中立性と現実の平行関係である。本稿で明らかにしたような、中立性が受動性においてすら既に現実との対称を成しているとする構図は、はたしてどこまで維持され得るのか。このことを明らかにすることによって、フッサール現象学における空想論についての包括的な理解が得られることになるだろう。

註

- 1) フッサール全集からの引用は巻数と頁数で示す。引用中の協調は傍点で示す。
- 2) David Hume, *A treatise on human nature being an attempt to introduce the experimental method of reasoning into moral subjects and dialogues concerning natural religion* vol. 1, T. H. Green and T. H. Grose, London, 1874., p311, 317, 386.
- 3) そしてこの概念が『イデー I』以降いかなる変遷を辿るのかという点においても、一致した見解はないように思われる。Liangkang N., *Seinsglaube in der Phänomenologie Edmund Husserls (Phaenomenologica 153)*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, 1999 では、中立性変様は「現象学的心理学的な還元」として引き継がれているとされるが (S.194)、文献の根拠は明らかではない。
- 4) 中立性と受動性の連関を指摘する先行研究として伊集院令子『像と平面構成 I』(晃洋書房、2001年)が挙げられる。しかし、この研究と本稿では、主題と使用テキストの二点において差別化が可能である。即ち、伊集院は全集 X X III 巻の講義録によって専ら像意識を取り上げるのに対し、本稿ではフッサール公刊著作である『イデー I』によって空想も含めた中立性という枠組み全般を主題化している。

ENGLISH SUMMARY

Husserl's transition from neutral potentiality to neutral passivity

TANAKA Shun

The purpose of this essay is to clarify the phantasy theory in Husserl's phenomenology with a relation transition from neutral potentiality to neutral passivity. Potentialities imply various senses in *Ideen*. We consider the potentiality of attention that belongs to the dimension preceding actual attention. This dimension has some common features with this passivity. Husserl searched for it in a later manuscript, *Analysen zur passiven Synthesis*. On the other hand, passivity is traditionally connected with phantasy theories. This is the same in Husserl's phantasy theory, in other words, the theory of neutrality. As a result, I can regard neutral potentiality as neutral passivity. We can find an example of neutral passivity. It is the "Einfall" (the flash of an idea). Husserl refers to it in a later manuscript. Therefore, we portray concretely

the continuity between neutral potentiality in the static phenomenology and neutral passivity in the genetic phenomenology. And through this consideration, we can get a clue about how to understand the whole phantasy theory in the phenomenology.

Key Words: Phantasy, Neutrality, Potentiality, Passivity, "Einfall"